
ラッキーな少年の物語

カマボコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラッキーな少年の物語

【Nコード】

N0687Y

【作者名】

カマボコ

【あらすじ】

運がいい少年は兎に角、気持ち悪く、近寄りがたい人間だった。そんな彼はマイナスではなく、プラスだった。箱庭学園の生徒達に迷惑を掛けていく少年。ただ彼の気持ち悪さは性格、行動からではなかった。そんな少年の物語。

【運が良くなりたい】

人間なら誰しもそんな事を考えるだろう。 なら、運がいい人間はどう考えるのだろうか？ 運が悪くなりたい？ 運が良くなりたい？ たぶん後者が正しいだろう。 運の価値なんて本人にはわからないのだから

×

「ふむ つまり、キミのスパイクを切り刻んだ犯人を捜せばいいんだね。 俺が解決してあげようか？ 生徒会長には言いにくいんだろう？」

何処か不思議な雰囲気とする少年は胡散臭い笑みを浮かべ、少女に言った。

「…………… 本当に見つけてくれるの？」

普通な少女は不安気に少年に聞き返した。

「大丈夫だよ。 金があれば何でもできるんだ。 こんな問題、簡単に解決できるよ」

少年はニヤニヤと気味の悪い笑みを浮かべた。

×

少女と少年の出会いはいっさいさっきの事だった

「……………」

普通の少女は下を向き、とぼとぼと廊下を歩いている。手には一枚の封筒、背中には哀愁が漂っている。

少女の目的はスパイクを切り刻んだ犯人を捜す為、生徒会室に向かっているのだ。何故、生徒会室に向かっているのかというと、現生徒会長が行った『目安箱』に投書しに行く途中なのだ。

生徒会長への信頼は確実なモノではないが、支持率98パーセントを叩き出した生徒会長のカリスマ性を頼ったのだ。二十四時間三百六十五日、依頼を受け付けると豪語した点で少女は生徒会長へ悩みを打ち明ける事を誓ったのだ。

ここの角を曲がれば目安箱の場所……と思い、角を曲がると

「ああ　これが目安箱か……　これを隠したら生徒会長はどのような反応をするのかな？　俺を更生させるのかな？　それはそれで面白そうだな」

はははと普通に笑っている様に見えるのだが、何故か気味の悪い不思議な笑みを浮かべた。笑っていた人物は黒と茶色が混ざった不自然な色をした、少し長い髪の少年だった。

少女はこんな変わった髪色の少年が学園にいたのか考えたが、もっと変わり種な髪の生徒が多かった事を思い出した。寧ろ、少年は地味な方だったのだが、何故か目立つのだ。

生徒会長の様に完璧で完全が故に目立つのではなく、何か、生

徒会長をも越える得体の知れない何かを隠しているように見えた。

「ん？ 事件の匂いとスポーツドリンクの甘い香りがするぞ？」

どちらも少女から漂っているモノだった。

「ああ、キミの匂いか。 スポーツドリンクが飲みたくなるよ。 帰りに買おうかな？ 砂糖二袋と一緒に」

少年はポケットから板チョコレートを取り出し、バリバリとかじり始めた。 急いで少女は風紀委員がいないか確認した。 いなかった事に安心してホッとする。

「ん？ 風紀委員の事なら大丈夫だよ。 どうせ諦めるから」

少年はそう言うのだが、どうせ嘘っぱちだろうと思った少女は慌てて少年から板チョコレートを取り上げた。

「ぬおっ！ 何すんだ同級生！ 俺の楽しみを奪いやがって！」

少年は玩具を取り上げられた子供のように怒った。

「同級生？」

少女の疑問が無意識的に口から出た。

「ん？ キミは二年生だろ？ だって、その首に掛けてるタオル。 それは二年生の陸上大会の参加者のみに与えられるモノだろう？ ほら、年月も合ってる」

少年が言った通り、少女のタオルは二年生達しか持っていないモノだった。　　だが、このタオルを貰ったのは一昨日の事だ。
一般の生徒ならわかる訳ない。　　一般なら。

「キミの悩みを解決してあげようか？　　お代は金で買えるモノでいいよ」

少年のニヤニヤとした胡散臭い笑みが少女には希望に見えた。

×

「ふむ　　あの人が犯人か……」

少年は一人の陸上部員を見て呟いた。　　陸上部員の名は諫早、三年生。　　少年は彼女がスパイクを切り刻んだ犯人だと彼なりの手段で確信したのだ。

少年は彼女に近づき、声を掛ける。

「あのー、すみません。　　このスパイクに見覚えありませんか？」

少年は手に持っていた切り刻まれたスパイクを見せ付けた。　　少年の表情は人を不愉快にさせるような胡散臭い笑みだった。

「　　しっ……知らない!!」

諫早は少年のスパイクに驚き、一目散に走り去っていった。

「あつ、逃げられた……　　別に伺っただけで犯人だなんて言ってな

いのになあ。これじゃあ、自分から犯人ですって言ってるようじゃないか。犯人失格だな。まあ、逃がさないけど」

少年は自分が持っていたスパイクの片方を諫早目掛けて投げた。少年がのんびりとしてる間に諫早との距離はグラウンドの端から端ぐらい。普通は届くはず無い。普通なら。

少年の投げたスパイクは諫早の方向を大きくズレ、陸上のラインへと落ちた。

そのスパイクは陸上部の足に当たり、蹴り上げられた。スパイクは宙を舞い、ゆっくりと落ちていく。そしてスパイクはサッカーボールと重なった。

サッカーボールごと蹴られたスパイクは勢いよく飛んでいき、

諫早の足に当たった。諫早は衝撃でバランスを崩し、

「ぐにゃ!？」

前に倒れこんだ。

×

「諫早先輩、どうして逃げ出したんですか？俺はこのスパイクに見覚えがあるか伺っただけですよ？自分の履いているスパイクと同じやつだ、とかでもいいんですけど」

少年はいつものように気分を害すような人を不安定にさせる笑みで諫早を追い詰める。

「どっ……どうして私が犯人だってわかったの？」

諫早が不思議そうに訊ねる。

「簡単ですよ。 お金を使いました」

「おっ……お金？」

「そうです。 お金です。 あなたの証拠の全てをお金で買い取りました。 陸上部で怪しい行動を取っていた三年生、それもレギュラーから外された人。 普通はこれだけでは解決出来ません。

まあ、生徒会長のような超人なら出来るんでしょうけど……

まあ、凡人の俺では不可能な犯人探しです。 なので、箱庭学園について一番知っているであろう人物に聞いてみると、なんと、目撃したそうです。

証拠の写真も貰いました。 これです」

少年は右ポケットから二十枚程の写真を見せた。

「『彼女』^{いわく}曰、三百枚程度違う角度から取った写真があるそうなので二十枚程度買いました。 それでこの写真に写っているのは誰何でしょうね？」

少年は持っていた写真をばらまいた。 その写真には依頼主の少女のロッカーを開ける諫早やスパイクをハサミで切り刻む諫早が写っていた。

「……………」

諫早は啞然とした。

証拠が有りすぎて反論も何も出来ない彼

女は脳から何か口に出来る言葉を探しているのだ。 所謂、パニ
ック状態だ。

「あなたも運が悪いですね。 もし、依頼主が俺に出会わなければここまで問い詰められる事もなかったでしょうに。 生徒会長が面白くもない解決策を生み出して、台本通りに終わってたのでしようけど、俺は徹底的に異常事態アドリフですから、何仕出かすかわからないモノでしてね」

少年はいつもとは違い、純粋な笑顔で諫早を見る。 少年の笑顔は純粋な筈なのにいつもより薄気味悪く感じた。

「うわっ……」

諫早はあまりの不自然かつ奇妙な笑顔に、つい、口から声が漏れてしまった。

「うーむ、やはり不自然な笑顔になってしまふな…… まあ、いか。 では先輩、俺はこの辺で」

少年は固まったままの諫早を置いて立ち去ろうとした。

「 待つて！」

やっと脳が追い付いてきた諫早は少年を呼び止めた。

「何ですか？」

少年は振り返らずに訊ねる。

「わっ……私はどうす」「簡単です。被害者に直接、心を込めて謝ればいいんです」

少年は諫早の言葉を遮る。

「六時に二年十三組に来てください」

少年は後姿からでもわかる程、笑っていた。

×

ガラツと教室のドアが開いた。

「失礼しまーす……」

諫早だ。諫早は二年十三組の教室のドアを開け、電気も点いていない真っ暗教室に入った。

「六時ジャスト、集合時間の十分前には集合するのがマナーですよ先輩」

教卓に座っていた人物が諫早に話しかけた。例の少年だ。少年はニヤニヤと諫早を嘲笑うかのような笑みを見せる。外は曇っている為暗く、教室の電気も点いていないのに少年は何故が目立っていた。

「えーと……」「ああ、俺の名前は『財宝』ですよ先輩」「どうして私の言いたい事がわかるのかな……」「先輩程顔に出る人間はいないでしょうね」「むう……」

相変わらずニヤニヤと人を馬鹿にした様な笑みで諫早をからかう財宝。 諫早は財宝を無視して被害者の少女を目で探す。

「ああ、先輩。 あの子はいませんよ。 この事を知りませんから」

少年は諫早の焦点を自分だけに集めた。

「えっ？ …… 来ないの!？」

「はい、先輩が犯人だという事も聞いてませんよ」

「じゃあ……何の為に……」

「先輩に被害者がどのように苦しみ、どのような状態にまで陥ったか、たつぷり話しましょう。 時間はまだまだありますから」

財宝は楽しそうに笑った。

一時間程度、財宝は少女の話をした。

財宝は大袈裟に曖昧に、そして苦しそうに少女の話をした。

財宝は終始笑顔だった。

×

「……………」

諫早は黙ってしまった。主な原因は少女への謝罪を考えて下さい、と極悪人の笑みではなく、普通の有り触れた笑顔で言われたからだ。財宝の普通の笑顔は何か気持ち悪く、胸を突き刺すかのような感覚に陥ってしまう気色悪い笑顔だった。まるで悪人が善人のふりをしているかのような不自然さが自分の精神を痛めつけるのだ。

財宝の言葉が重くなり、一つ一つ積み重なっていく。たった一度の行為で心が折れそうになる。財宝の言葉に従わないと痛みが増すようになる。なので、今の諫早は少女への罪悪感しか溜まらない。

そんな諫早を見て、財宝は……楽しみを得た子供のようにニヤニヤと笑っていた。全て財宝の計画通りで思惑通りなのだ。時計を二三度確認する。そろそろだ、と財宝は嬉しそうに呟いた。

時計の針は七時を指す。同時に教室のドアが開いた。被害者である少女が教室に入ってきた。財宝は諫早の肩を叩き、囁く。

「来ましたよ」 財宝がそう囁くと諫早は目にも止まらぬ速さで少女の目の前に立つ。

「……………ごめんなさいっ!!」

諫早が謝ると同時に膝が地面に付く、罪悪感から開放されて緊張が解けたからだろう。諫早は一言言つと何も言わずに立ち上がり、走り去っていった。

「七時ジャスト、集合時間の十分前には集合するのがマナーだよ。『有明ちゃん』」

財宝は声を張り上げて言った。

×

「つまり、『諫早先輩が犯人だった』ってこと？ 『財宝くん』」

「まあ、そういう事だね。『悪意百パーセントでやったんだと』それでどうするんだ？ 『許すのか？』」

財宝は無表情で有明に訊ねる。

「『許す』それが私の出した答えだよ。今までの私なら絶対に許さなかったと思う。だけどキミを見たらそんな事で怒ってた私がちつぽけに見えちゃって……嘘を混ぜたり、大袈裟に言ったり、全部私の反応を見たかっただよな？ プラスに転ぶかマイナスに転ぶかを。それに財宝くん、キミのその人間が最も嫌う非道で卑怯な性格。いや、人格。まるで『お宝を人から遠ざけているような』」

「『はっ……』」「えっ？」

「あははははっ！！ いやいや、こんなにも俺を推測した人間は始めてだよ有明ちゃん。一日も経たずに俺の半分以上を解き明かされたね。あの『生徒会長^{めだかちゃん}』よりも凄いいんじゃないかな？ 凄いに決まってるよ！ キミは才能の塊のような人間だね！ ああ、生徒会長には持てない才能だよ。普通の才能。生徒会長のように決まった勝利じゃない。台本にはない異常な行動が出来る才能だ！ まさかこんな人物がいるなんて……流石、箱庭学園と言ったところかな？ 俺もラッキーだなあ」

財宝は楽しそうに、高らかに笑うのだった。

×

「……不知火、今日は一段と食ってないか？」

「ああ、今日はいいんだよ　『ラッキーだったし』」

「はあ？」

少年は首を傾げた。

ヒトガタが言葉を発する。

「×××××！ ×××カネ×××！」

『カネ』とだけハッキリと聞こえた。 ヒトガタは俺に触れようとする。 だが、俺には触れられなかった。

【害を成すモノだったからだ】

×

音楽室に二人の生徒がいた。 一人は異質で不気味な雰囲気がある近寄りがたい少年、もう一人は何処にでもいそうな一般的な少女。 少年、財宝はニヤニヤと人が嫌いそうな笑みを見せると、ピアノの前行き、座った。

「うん 折角^{せうかく}だし一曲弾こうかな？」

少しワクワクしながらそう言った。

「えっ？ 財宝クンってピアノ弾けるの？」

「一応な。 唯、不愉快な音階が耳障^{みわ}りだと言われたけどね。 だ
から聴かない方がいいよ有明ちゃん」

財宝は耳を塞^{ふさ}ぐそぶりを見せる。

「いや、聴いてみたいな」

少女、有明は財宝に近付き、ピアノを眺めた。

「……まあ、好き勝手に弾こうか」

財宝は何故か少し躊躇ためらいながらも鍵盤に手をやる。指が鍵盤に触れた。

「うわああ!？」

有明は耳を塞いだ。えげつない程酷く適当な音ではなく、耳障りに近い不協和音のような気が狂いそうな音だった。発泡スチロールを擦ったような、耳元に蚊が近づいたような、不快の極みのような、人間の気分を害する為に作られた音だった。よくこんな世紀末みたいな音を作れるなと思いつながら必死に耳を塞ぐ。汚くはないのだが精神を引き剥がされるように痛々しい音が脳を狂わせるのだ。

さらに、音楽室の壁が風化していた為、音が廊下に響いていた。

昼休みである今、音楽室前の廊下を渡る生徒も少なからずいる。

幸いこの棟を使う者が少なかったのだが……音楽室付近にいた生徒達が頭を抱え、苦しんでいた。別に肉体的ダメージというものはないが、今までに体験した不幸な記憶などが頭によぎり、気持ち悪くなる。さらに音が不快かつ奇妙な音階で音が続いている事自体不思議な音が鼓膜を刺激し、不安定なもやもやとした気持ちになるのだ。中には苦しさの余りに嘔吐する者もいた。

だが、財宝はそんな事はお構いなしにピアノを引き続ける。

「ストップオオウプツ！！ やめて！ 止めて！ ストップ財宝ク
ンー！！」

有明がピアノに熱中している財宝の耳元に近づき、精一杯叫んだ。

「……………ん？ ああ、有明ちゃん。 どうしてそんなに取り乱し
てるんだ？」

財宝は頭にクエスチョンマークを浮かべて首を傾げる。 有明は
怒りマークを浮かべて財宝を睨んだ。

×

「 俺は子供の頃から放送部に入るのが夢だったんだよ」

財宝はニヤニヤと笑いながら放送室の鍵を開ける。

「……………どこで手に入れたのそんなもの」

財宝の手にはマスターキーが握ってあった。

「金で買えないものは無いんだよ有明ちゃん」

ニヤニヤいつもの様に笑いながら放送室のドアを開けた。

×

「おおっ、これで放送が出来るのか」

財宝は放送用のマイクを見て言った。目はキラキラと子供のように輝いている。

「財宝くん、やめといた方が」「あー、あー、マイクのテスト中」
「遅かったか……」

有明が財宝を止めようとしたのだが、財宝はすでにマイクのスイッチをオンにしていた。

「あー、全校生徒の皆様、こんにちば。俺は二年十三組の財宝と言うモノです。どうして一般の生徒である俺が放送しているのかというと、皆さんの力になりたいからです。力になるとはそのままの意味なのですが、天邪鬼^{あまのじゃく}なヒトもいるでしょうし、詳しく説明しましょう。何か悩み事があったら生徒会長ではなく、俺に相談してください。そうすれば確実に解決できます。ここまでは生徒会長と同じでしょう。でも、ここからは違います。何でも相談可能です。例えば……Aさんがム力つくから変死させてほしいとかテストを満点にしてほしいなどなど、子供なら誰もが考えそうな狂気染みた相談まで受け付けます。しかも報酬は入りません。俺はヒトの喜ぶ顔が好きなので一般入ですから。そんな夢や希望のある生徒は二年十三組まで。以上」

財宝は楽しそうにマイクのスイッチを切った。

「……………うわぁ」

有明は驚きと不安な気持ちでいっぱいになった。唯、今の財宝を見て、少しの発見があった。この人は子供の残酷さが残ったまま成長した人だと。

×

「うーん、誰も来ない……」

財宝は二年十三組で待機していたのだが、財宝を頼りに相談する人物は一人もいなかった。

「全部、生徒会長めだかちゃんの影響か！……面白くないな」

はあ……とため息を吐いた。ちなみに有明は部活に行き、現在、一人ポツンと教室で待っているのだ。

誰も来ないなと思ったその時、教室のドアが開いた。財宝は相談者では無いことを知っていた為、気だるそうにため息を吐くのだった。

「『財宝』と聞いてもしやと思ったら……やはり貴様だったのか財宝……」

生徒会長のめだか率いる生徒会の全員が教室に入ってきた。

「久しぶりだけど……相変わらずキミは面白くないね。無機物のロボットのようだ。行動パターンも何もかもが台本どおりで、決められた人生を歩んでヒトを愛して死ぬんだろうな」

財宝はニヤニヤと笑わずにぶつきら棒に言葉を吐いた。

「めだかちゃん……コイツは……」

生徒会の庶務の人吉善吉がめだかに君の悪い少年について訊ねた。

「『財宝』 苗字は名乗らないから聞いたことがないのだが名前だけは知ってるぞ。 何処か『球磨川』に似た気持ち悪さがあるから異常だとは思っていたが……まさか十三組にいるとはな。 流石に気がつかなかったぞ。 財宝二年生、貴様がかつて心優しい少年だったことは知っている。 何か不幸があつて性格が捻じ曲がつてしまったのだろう……だから私が更生させてやろう！ 完全にな！」

めだかが上から目線で財宝に言った。

「どーでもいいー、まあ、一つ言えることは『俺が不幸になるわけないじゃないか』」

財宝はいつものニヤニヤ顔に戻り、窓を叩き割った。

「……っ！？ 逃がさんぞ！」

めだかは財宝の行動を判断して、財宝を捕まえようと前進したのだが、

奇跡的に足元にレンガがあり、偶然、それに躓き、

「うおっ！！」

完璧超人である生徒会長がこけた。 しかも落下点には横たわった机、その机がめだかに当たる目と鼻の先で、

「うらあああ！！」

善吉がめだかを支えた。まさに間一髪の所だった。

「……ははは！ 善吉キミの方が面白そうだ！ その主人公より面白いよ。これだけでも今日の成果は有ったかな？ ラッキーだね」

そう笑つと財宝は二階から飛び降りた。

めだか達は慌てて外を見る。

財宝が飛び降りた先には陸上部のマットがあり、そのマットに飛び込んだ。無傷では済まない筈なのに何事もなかったかのように立ち上がり、そのまま走って逃げてしまった。

「何者だよあいつ……」

善吉は逃げていく財宝を見つめながら呟いた。

2（後書き）

感想、誤字などがありましたら感想に書いていただくと嬉しいです。

3 (前書き)

最初だけ一人称

「つまり、財宝クンにはフラスコ計画の十四番目ウラカタをしてもらいたいのです」

理事長が89032793「j」ふえsえ。

「十四番目ですか……十三人を確認しましたが十分じゃないですか？
核爆弾でも落とされない限り……」

俺がさdふえgれwrgrvgwvdwあsdじdさdwでふえ
fwqfqふあsf。

「生徒会長が敵なんですよ」

「降参した方がいいんじゃないですか？」

俺は『dfhufvpdふあんsvbvndfじゅbどちs』と思った。

x

「いやいや、それだけの理由で」「十分な理由です。核爆弾よりも恐ろしいじゃないですか」

財宝はいつものようにニヤニヤと笑わずに真剣な顔だった。理事長はそれに気づき、問う。理

「どうしてあなた程の人間が彼女を恐れるのですか？ あなたのそ

の『福作用』なら絶対に攻撃されないのに……」

「俺の異常は戦う為にあるんじゃないんです。ご褒美のようなモノですかね？ 宝探しの宝のような役割です。不公平さと例外を身に着けたものにしか手に入らない……ね」

財宝はいつものようにニヤニヤと人を見下すかのような笑みを浮かべた。

「それに、俺は彼女が怖いんです。その異常さが怖くて恐ろしいんです。決められた人生を歩むのを楽しんでいる。それが怖い。それに他人の人生までも左右させてしまう所ですかね。人吉善吉くんが一番の被害を受けているでしょう。予言しましょう、彼はいつか生徒会長に捨てられます。決められて、なお、人生を棒に振る破目になるでしょう。まあ、いつか解決させるでしょうけど」

財宝は無表情で語った。興味が無さそうに。

「……では、あなたは関わらないでいいえ、妨害させていただきます」「えっ!？」

財宝はニヤニヤといつもより歪んだ笑みを見せた。凄く嬉しそうに、笑うのだった。

「たとえば、俺が嫌いな人物でも危険人物でも最悪な人物でも、俺は妨害します。それが負け戦でも価値が確定していても俺は妨害するでしょう。俺は他人に迷惑を掛けるのが好きなだけですから」

理事長は財宝の気持ち悪さを改めて思い知る。人間の憎悪と邪

悪さを一緒にした、正に、悪人だと　　自分が味方でよかったなどという気持ちもない。　　いつ裏切るかさえわからない、汚れすぎて寧ろ、眩しすぎる。　　兎に角、理事長は仲間に出来た喜び以上に、後悔があった。

「一応、言っておきますけどあなたは黒神めだかを倒すのではなく、
フラスコ計画を完成させるのを手助けする十四番目ウラカタなのです。　　決
して、十三組の十三人の邪魔にならないよう！」

「わかりませんよ？　　自分の行動すら読めませんし」

あはは、と笑う財宝を尻目に、理事長の財宝への恐怖は積もるばかりだった。

×

「うわあゝゝひつまだあゝゝ」

「と言いつつ何普通に生徒会室入ってるんだよお前！」

現在、財宝は何故か生徒会室にいる。　　どうして？　と聞けば、
適当　と答えるだろう。　　本当に理由も無く自然に入ったのだ。

「……めだかさんがいない今生徒会を潰しにきたのか？」

金髪の長い髪の男、阿久根高貴が構えながら財宝に恐る恐る訊いた。

「んんん？　べっつにゝ、そんな面倒な理由もないよゝ。　暇つぶしだよ暇つぶしゝ、友達がいないぼっちな俺をかまってやってくれ

よ。俺だって生徒会長の敵なんてポジションなんてやだよ。皆友達だよ、友達。だから仲良くしようぜお三方？」

財宝はいつものようにニヤニヤと笑うのだが、気持ち悪さは無かった。そして彼が凄く眩しく思えた。

「いやいやいや！？ きゃら崩壊ってレベルじゃないよね！？ もう別人の域だよね！？ 作戦？ 油断させておいて隙をみせたら討つ！とか」

生徒会会計の喜界島もがなは財宝ののほほんとした姿を見て、取り乱した。

現在、生徒会長の黒神めだかは仕事の為いない。めだかを嫌がっていた財宝を見ていた生徒会メンバーはめだかはいない生徒会を狙って此处に来たのかと疑っているのだ。

勿論、財宝にそんな気は全くない。喋り相手欲しさなのだ。

「討つ！ って言われてもね。俺は別にさいきょってわけでもないし、てんさいってわけでもないからね。唯、ちよつと運がいいだけだし、倒すのなら倒せばいいじゃないか。俺は抵抗しないよ」

「……まあ、ここはお前を信じよう」

「人吉くん！」

人吉の判断に驚く二人、それを見た財宝はニヤニヤと笑った。

「コイツからは戦う気力が感じられない。もう元からないみたいだし、今日ぐらいいいんじゃない」 「甘い物食べたい」 「えっ？」

「甘い物が食べたい。でも今は持っていない。なら買いに行かなくちゃならない。なら此処から出て行かなきゃならない。わあ！ 急がないと！」

財宝は猛ダッシュで生徒会室を飛び出し、走り去っていった。

「……何で来たんだよ……」

生徒会一同が一つになった瞬間だった。

「ふもふも　つまり、生徒会と戯^{たわむ}れる間は何もするなという事かい？　ふもふも。でもでも、俺もそんな真剣勝負を邪魔したくなっちゃう性質^{たち}なんだよね。　ふもふも。人間の汚点を集結させたら俺になるらしいぜ？　ふもふも」

財宝はお菓子をふもふもと食べながら聞き返した。

「黙ってここに閉じこもってお菓子でも食つとけ！　はあ……どうして俺が不要物を用意するんだよ……」

明らかに高校生には見えない背丈の少年はため息を吐き、自分より背丈の高い平均的な生徒達を使い、両手が塞がる程いっぱいのお菓子を運んでくる。それを繰り返し、二年十三組の教室はお菓子で埋め尽くされてしまった。

「わーい、天国みたいだね。　はっぴーはっぴー」

あははーと幸せそうな顔で財宝が言った。

「ぶん殴りてえ……」

少年、雲仙冥利^{うんぜんみょうり}は改めて財宝が嫌な人間だと思い知らされた。経済的な意味で。

×

放課後、現在、学年一嫌われているであろう人物が居座っている

二年十三組のドアが開いた。

「こんにちはー」

有明だ。今日は陸上部が休みな為、友人の財宝の所へ遊びにきたのだ。

「　　ってなんじゃこりゃあああ!？」

有明の声は静かな廊下に良く響いた。

×

「何なのこのお菓子の山は!」

有明はお菓子の山のとっぺんに寝転がっている人物に向けて叫んだ。

「ん? ああ、久しぶりだね有明ちゃん。俺は今仕方なく大人しくしているんだ」

「教室をお菓子で埋め尽くす事を大人しくとは言わないよ!」

「まあ、俺にも色々あるのさ。　これが仕事ってやつ? いや、寧ろライオンの餌付けに近いね。　迷惑掛けないように餌に気をとらせておく的な?」

財宝はいつものように酷く憎悪が乱れた笑みを見せる。　相変わらずのようだ。

「いやいやいや！ 全然わかんないよ全然！」

「俺みたいになればわかるぜ？」

お菓子を貪りながら厭らしい笑みを見せる財宝。 この喋っている間にもお菓子を食べ続けており、山のように積みあがっていたお菓子が丘のように平らになっていった。

「その貧弱そうな体の何処に入るの……」

「甘い物は別腹と言うじゃないか」

「そんな意味じゃないよ！」

財宝は相変わらずのようだった。

×

「 腹八分目ってやつだね」

財宝は一時間ちよつとで山のように積みあがっていたお菓子を食べ尽くしてしまった。 僅か一時間ちよつとでだ。 化け物のようだ。 それでいてまだ腹八分目と抜かすのだ。 恐ろしい人物だ。

「これを人間の神秘って言うのかな？ ……財宝クンなら普通だと思ってしまう私が怖い……」

慣れって怖い……と思っている有明だった。 その間に財宝が教室を出て行く事に気づかない程凹んでいたのだろう。

x

「さくさく　お腹も満たされたから遊びに着ただけ……
もう終わりそうだね。冥利君にはもつと粘って欲しかったな！。
こつ、めだかちゃんがちよつと苦戦してるぐらいにね。そこで
俺が登場して台無しにするのさ。バトルなんて無かったって感じ
に」

「……結論だけ聞こうか」

「邪魔したいです」

「聞いた私が馬鹿だったよ……」

はあ、とため息を吐く生徒会長こと黒神めだか。　現在、風紀委員
長である雲仙冥利と戦い、勝ったものの自らを守らない戦い方を
した為、傷だらけで動けないほどだ。　今は善吉におぶってもらっ
ている。

「完璧超人のめだかちゃんが馬鹿だったら俺なんかプランクトン以
下だよ。それよりそれより、キミが冥利君を倒したせいで面倒な
ことになるよ？　暫くすると異常者達ひようしやが学校で大暴れ！　とか展開
？　まあ、俺には関係ないけどね。　ああ、言うつもりなんてプラ
ンクトン並みに無かったのについ口が滑っちゃったよ」

わははと無理に作った笑顔で笑う財宝。　生徒会一同は財宝の発
言に驚いた。

「異常者……まさか！　十三組が！？」

「たぶんそうなると思うね。曖昧でごめんね。俺の憶測だし、口止めされてるしね」

財宝は指でバツマークを作り、口にあてた。その腑抜けた行動が人をいらつかせるには最適だった。

「落ち着け私落ち着け私落ち着け私……こいつにム力ついている暇なんて無いんだ……ふう、ままままあ、貴様がそ、そう言うならし、仕方ないな！」

「ん？ どうしてそんな顔するんだい？ 俺は情報提供してあげたいい人なのになー。そんな顔すると俺が悪いみたいじゃないか。全く、人の気持ちつてもんを考えてくれよな」

「善吉……一発ぐらいならぶん殴っても」「駄目！」

財宝は相変わらずだった。

×

あれから何週間が過ぎ、財宝はというと……

「ん？ 何だか俺と似たような奴が……いや、違うか間逆って感じ？ 俺が正義ならキミが悪かな？ いやいやいや、俺が正義なわけないね。寧ろ、悪の根源ってやつかな？ じゃあ、キミは何なのかな？」

「『キミが悪？』『あはは』『ないないありえないね』『悪でも正義でもないじゃないか』『そして悪の敵であり、正義の敵でもあるのさ』『全ての敵ってやつ』『だからキミは正義にもなれな

いし悪にもなれない』『傍観者さ』

何処か気持ち悪い雰囲気とする学ランの少年とニヤニヤと悪の親玉のような笑みを見せる少年はお互いについて語っていた。

「へー、どうでもいいけど一つ言いたいことがあるんだ」

「『ふーん』『どうでもいいけど』『一つ言いたいことがあるんだ』」

二人は声を揃えて言う。

「俺は」「僕は」

「キミが大嫌いだ」「キミが大嫌いだ」

そう言うと二人の少年は気味悪く笑い、別方向に歩いていくのだ。
った。

5（前書き）

能力説明回

「では、あなたには古賀さん達と一緒に戦ってもらいましょうか」

「俺が戦う？ あはは、冗談は性格だけにしてくださいよ。俺はそんなバトル漫画向けのキャラじゃないですし、どちらかといえば打ち切りバトル漫画の脇役ってところですかね？ つまり、バトル漫画の底辺の底辺ってところです」

「ですが……」「でも、俺は妨害することが出来ます。しかも相手に攻撃されません。打ち切ってますから」「それは好都合ですね」

理事長は財宝のように悪役らしく、笑うのだった。

x

「どうして俺がこんなことしなければならなんだー。今からマヤ文明の予言が当たるよりも大変な事があるというのにー」

「どうせお菓子買っとかそんなのだろ？」

「うん、糖分補給」

財宝はのほほんと答えた。その反応を見て、包帯で顔を隠している少女はやれやれと面倒くさいなと思うのだった。

x

「あー、どうして俺がこんな面倒事を頼まれて申し受けたんだろう？」

財宝は自問自答する。 人の嫌がることをする為なら何でもする人間である財宝は面倒なことさえ維持でもやる。 財宝は霊長類で最も嫌われそうな性格だった。

「（ねーねー、名瀬ちゃん…… どうしてコイツがここにいるの？）」

包帯で顔を隠している少女、名瀬妖歌に明らかに私服な少女、古賀いたみが小声で訊いた。

「（こつちが訊きてえよ…… 理事長は何を考えてるんだ？ コイツと仲良くする方がフラスコ計画より難しいだろ……）」

古賀と名瀬は一緒にため息を吐いた。 そう、財宝と関わると気分が極限にまで下がってしまい、人間、地球上の生物の九割は生理的に受け付けないのだ。 つまり、現在財宝と仲が良い人物は地球上の一割の例外なのだ。 それは財宝の異常である能力のせいなのだが…… その話はいつかするだろう。

「あー、もう、どうしてこうなったんだよ。 キミ達も嫌だろう？ こんな気持ち悪い人間が傍にいてさ。 俺もこんな面倒なこと辞めたいんだしさー。 これは…… いっその事めだかちゃんに敵対して…… 駄目だ駄目だ！ あんなバトル漫画にしかないなさそうな人間に勝てる訳ないし、ありえないありえない。 どーしよー。 どーしたらいいと思う？ 名瀬ちゃん」

「俺に振るなよ」

「じゃあ、古賀ちゃん」

「私に振らないでよ」

「……………」

財宝に仲間なんていなかった。

x

「じゃあ、俺は何をすればいいんだ？」

俺は 00だdsbfだsdながらdfd88sw、ゝゝ。と言った。

「とりあえず、生徒会一同と仲良くしてあげたらいいんじゃないか？ もうこの辺にいるだろうし」

名瀬ちゃんは9832jpf:。…な顔で…………、m@pm:に言った。

「うーん…… まあ、そうするかな？ じゃあ、理事長を裏切ろうそうしよう。 てか、俺はどっちに付くんだろう？ あの学ラン少年も傍観者だとか何とか言われたしなー」

俺は9054.@@.:.「……………」と思いながら……。@@「」「」
「¥¥¥った。」

x

「……どうして此処ちかにいるんだ財宝」

「えええ？ 俺が何処にいたっていいだろう？ まさか俺がめだかちゃん達を倒す為に来たとか思ってる？ 嫌だなー、キミ達は自分の事を物語の重要人物だとか思ってるのかい？ いいなー、その自己意識過剰でお気楽な考え、俺には真似できないよー。尊敬するよ崇高するよ信仰するよ。 あはは、いい性格してるよ。 だからキミは主人公めだかちゃんなんだ。 キミが幸せなら俺は何も言わないけどね。 スライムAはキミに倒されるのさ」

「……何が言いたいんだ？」

「スライムAは仲間になりたそうな目でそっちを見ている」

「……はあ！？」「……」

財宝が仲間になった。 パーティの運が上がった。 高感度は限界まで下がった。

財宝は孤立している理由は一つだ。 仲間になった方が偏ってしまっからだ。 つまり、財宝が仲間につけば、

負けるからだ。

財宝の能力、『福作用』ブラックは異常な幸運とは少し違う。 幸運の価値なんて人間によって変わってしまう。 つまり、財宝の幸運と理想するもの。

財宝の幸運は自分で決めた運、好きな時に好きなタイミングで好

きな幸運を操れる能力なのだ。 使い方によってはめだかさえも超えてしまう危険なモノなのだ。

だが、財宝はその幸運を欲深く使ったことはない。 生活費（主にお菓子代）ぐらいだ。 後は自分の悪ふざけ（子供の悪戯に近いもの）ぐらいだろう。 決して、悪の親玉の考えは……無いともいえなくななくななくなもない。 言い切れない辺り財宝らしい。 この能力のせいで財宝の人格が作られたのだが、それはまた後の話で。

一つ、言っておくと財宝は過^{マイナス}負荷ではない。 異^{プラス}常だ。

×

「頑張れーがんばれーガンバレー……面倒くさい」

「冗談で言っただけだなー……」

あーあ、と脅威の棒読みで名瀬が言う。 何だコイツと言わんばかりに摩訶不思議の生物を見るかのような目で見る古賀。

「やっぱりどちらかに付くって面倒だね。 仲間も全部何もかも敵にしが見えないや。 全く、友達いない人に仲間なんて空想にしかないんだよねー。 空想なら傷つかずに頷くだけだし、楽なものだよ。 まー、何が言いたいかって言う……もっと面白く飽きないような感じで戦ってよ。 そうじゃないと俺が台無しにするよ？ 全部ね」

財宝は子供が見たらひきつけをおこしそんな酷く歪んだ笑みを浮かべた。 だが、皆は驚かずにまたかため息を吐いた。 馴れと

は恐ろしいものである。

現在、阿久根と古賀が戦っていた所、めだかが現れ、古賀に圧倒的な力の差を見せ付けた所で財宝が現れたのだ。相変わらずの妨害好きだった。

「……財宝、貴様は何がしたいんだ？」

「邪魔」

「いや、そうじゃなくて……何が目的なんだ？」

「嫌がらせ」

「うぬっ……」

めだかは心底悔しそうな顔をする。財宝の相手をするとは最初はイラつくだけなのだが、後々、疲れと虚しさが限界値に達する。軽く言うとイラつくし疲れるし虚しくなる負の三大要素てんこ盛りだ。生物には必要ない人間といえる。

「おい自称妹、こいつは別に目的なんてそのまんまだと思うぜ？」

名瀬 いや、黒神くじらが財宝を指差しながらそう言った。

「そのまま？」

めだかは聞き返す。

「そうだよ。こいつの目的は妨害、邪魔、嫌がらせ、どっかのガ

キ大將みたいなもんだ。 唯のかまってちゃんだよ。 胸糞悪い糞ガキ」

くじらの放った言葉が財宝に突き刺さ

「そうだね。 俺はかまってちゃんのようだ。 寂しがり屋のうざい脇役つてところかな？ ああ、気持ち悪い。 悪いけど言葉で動揺するようなできた人間じゃないんだ俺は」

らなかった。 財宝に精神攻撃は通用しないようだ。

「でもでもなー、一人間としてそんなどっか行けみたいな目が心に来るんだよなー。 仕方ない。 隠しボスにでもちよっかい掛けに行こうかな。 覚えてろよー、ははっ」

財宝は誰でもわかるような作り笑いで笑いながら何処かに行くのだった。

財宝がいなくなった空間が静かになったのは言うまでもない。

六人の生徒が仲良くしてねと言った。その時、【壁がボロボロと崩れ始めた】

壁はゆっくりと崩壊していき、一人が通れそうな穴が空いた。嫌な雰囲気をする六人も、チーム負け犬と言う六人も、生徒会長のない生徒会のメンバーも、そのぼっかりと空いた穴を見た。すると崩壊した壁から何やら人間の声が聞こえてくる。人間の声なのだが、超音波に近い不快感のある、音の暴力のような特徴的な声だった。

「【仲良くしてね】か……俺には無縁な言葉だね。こつちが仲良くしようとしても、相手は拒絶してくるんだよ。酷いもんだ。差別だ差別。人間怖いよ。めだかちゃんは大好きな人間は俺を嫌うんだ。あーなんて酷いんだー。だからキミ達も怖い。怖いから仲良く相打ちしてくれない？俺が邪魔するからさ」

財宝はニヤニヤ笑いながらそう言った。財宝は敵でもなければ味方でもない。学ランを着た少年の言った通りだった。

×

「ねえ、どうして皆頑張ってる中、キミ達四人は動かないんだ？あれかい？あの動いた方が何とやらってやつか？そんな漫画チックな話があるわけないだろう馬鹿らしい。寧ろ、動かないでどうするんだよ。人間なら前に進めってもんだよ四人さんよー。」

ほら、俺だつて動き回つてゐるのに無傷だぜ無傷。ノーダメージつてやつだよ。動かずに得することなんて存在しないんだよ。我慢なんて無視しちやいないよ。体に毒だぜ？ ヒットポイントが削られるんだぜ？ ポケモンセンター行きだぜ？ それなら当たつて碎けるの精神で何事にも体当たりした方がいいだろう？ ほら、俺みたいにさ」

「……お前が言つても説得力ねえんだよ」

財宝が言つた通りウロウロと歩いているのだが、裏の六人の攻撃も負け犬軍団の攻撃も全て当たらないのだ。それは財宝が避けているのではなく、モノが自ら避けているように見えた。財宝には当たらないように設定されているようで気持ち悪いものだった。

「裏の六人の奇想天外で個性的な能力が薄れて見えんねんけど……
このラッキー君、よく目立つとるな」

財宝の外見は、髪が茶色と黒の混ざつたような普通なら目立つような色で、服装も少し乱れており、目に付くだろう。だが、裏の六人も負け犬軍団も一般では有り得ないようなフィクションみたいな風貌をしている人達だ。なのに一番地味である財宝が目立つことが奇妙だった。

「嫌われ者ほどよく目立つんだよ。皆は上手く演奏できるのに一人だけ大きく音程外れてるみたいな嫌な目立ち方だけだね。悪目立ちつてやつ？ まあ、ある人いわく悪に成りきれていないらしいけどね。でも善人でもないらしいんだ。じゃあ、俺は何なんだ？ と思うだろう？ その人は俺を傍観者と言つたんだ。ステージに乗り込んでくる観客が一番キミらしいって言われたよ。ようするにかまってちゃんの迷惑人間だそうさ。俺らしいや」

あははと笑う財宝。だが、目は笑っていないかった。その目はその人物を怨むような憎悪が混じった危険な者の目だった。

「それでさ、そのある人がね。此処に来るらしいんだ。何時^{いつ}かも何処にかもわからないけど兎に角ね。その人はこの学園を滅茶苦茶で原型留めないぐらいにぐちゃぐちゃにするだろうな。憶測^{憶測}だけだね。まあ、めだかちゃんが何とかするだろうけどさ……それを妨害しないかね。両者とも」

財宝は楽しそうに笑う。玩具を見つけた子供のように。

「『ねえねえ』、『どうしてキミがこんな所にいるのかな?』『気持ち悪い運命ってやつ?』『僕は悪い事もしてないのに酷いもんだよ』」

奥の方から寒気のするような声が聞こえてきた。財宝以外、奥を見る。そこには学ランを着た少年がヘラヘラと笑いながらゆくりとこつちに近づいていた。デジャブのように思えた。

x

「あれ? 軽く冗談半分で言ったんだけど、これフラグだった? 勇者の初めての戦闘が魔王みたいなもんだよ? もっと遅く現れなよ悪役。ラスボスは最後に現れるもんだ。こんな中ボス戦で現れたら弱っちく見えるぜ? 学ラン先輩」

「『あれ?』『知らなかった?』『僕は霊長類で一番弱いんだぜ?』『ラッキーくん』」

二人の少年はニヤニヤと気持ち悪く笑う。顔は笑っているのだが、何処か怒りが混じったような笑顔だった。

二人がわざとらしく笑っていたその時、二人の背後から黒い何か飛び出してきた。

黒い何かは髪の毛だった。ちくぜん ゆとり 筑前優鳥（曖昧）の能力、『トリックオアウトメント 髪々の黄昏』によって伸ばした髪による攻撃だった。

髪は財宝に届きそうなところで不自然に曲がり、天井にぶつかった。だが、球磨川は無抵抗。髪の毛に拘束されてしまった。財宝は拘束された球磨川を見て呟いた。

「本当に弱いのかな？」

財宝ははったりか何かだと思っていた為、少し驚き、つい口から言葉が出た。それを見た球磨川は珍しいと思いつつもものようにヘラヘラと笑いながら気味悪く声を発する。

「『だから言っただじゃないか』『僕は一番弱いつてさ』『完全に弱者なんでね』『僕は弱さを自覚しているんだ』『キミみたいに異常じゃないんだよラッキーくん』」

球磨川が言い切ったと同時に銃弾が飛んでくる。財宝への攻撃は全て除かれる。だが、球磨川への攻撃は全て直撃した。

「流石先輩！銃で撃たれても死なないなんて漫画チックで凄いですね。俺なんて銃弾くらっただけで即死しちゃいそうですよー」

髪の拘束から解かれて銃弾を浴びた球磨川は床に倒れた。
それを見た財宝がそう述べたのだ。 誰がどう見たって死んでる
と言い切れる光景でだ。

「自称弱者は床が大好きなのかい？ 弱者なら最後までグダグダ
しましうぜ？ もしかしたら勝てるかも知れないじゃないか？
何なら俺が仲間になろうか？ 暇だし」

財宝はニヤニヤとぶれない笑みで球磨川に言った。

「『誰がキミを仲間にするんだい？ 一人ぼっちくん』 『そんなにマイナスぶってもキミは唯のプラスだ』 『口調だって作り物だから安定してないし』 『性格も偽ってさ』 『醜いもんだよ』」

球磨川は立ち上がった。 そして何故か球磨川は

『無傷だった』

財宝以外の人間は驚く、と同時に意識がとんだ。 球磨川が
何処からか出したネジで壁に拘束兼攻撃したのだ。 わずか数秒
の出来事である。

一人だけ狸寝入りしていたのに財宝と球磨川は気付いたのか気
付いてないのかは別の話。

7 (前書き)

会話が長いです。

「なんだ……これは……」

めだか達が見たものは、チーム負け犬と裏の六人達プラスシックスが床や壁に螺子で打ち付けられている光景だった。

驚きを隠せないめだか達。すると、奥から何やら話し声が聞こえてきた。嫌な予感しかしなかった。悪の塊と表現できない塊の姿が見えてしまったのだから……

「『あーやだやだ』、『キミと話していると気分が悪くなるよ』、『マイナスより性質が悪いね』、『マイナスぶってるプラスなんてどっち付かずもいいとこだよ』、『幸せな奴が過負荷ぶっちゃってもう！』、『幸せだからできる行動だよ』、『そんな事するからさ』、『嫌われるんだよ？』」

「人間で一番言われたくない奴に言われたらおしまいだなー。何処に向かっているんだろ俺。後さ、『嫌われるんだよ？』って言ったけどさ、『わざと嫌われるようにしてる』とだけ言っておこうか。ほらほら、伏線だぜ？ 回収準備はいいのかい？ もっと貼ろうか？ 『マイナスには幼馴染がいるかもしれない』、『xxxに久しぶりに会いたいな』とかね。……前者は回収してほしくないな。逃げよう、何処か遠い場所へ」

財宝はいつものようにニヤニヤと笑わず、無機質に近い表情でその場を去ろうとする。

「『幼馴染？』、『そんなキミの作ったキャラを崩すほどの人物がい

たかな?』……』『今とは違う性格のキミが優しくした女の子の性格が途轍もなく恐ろしいものでトラウマになるレベルだったかじゃないよね?』」

「……………」

財宝は逃げ出した。いつものように余裕あつての逃走ではなく、余裕なしの全力ダッシュだったことから凶星だったことに間違いないだろう。

×

あれから何日か経った。財宝は公園のベンチで横になって考え事をしていた。勿論、ニヤニヤとした表情だ……と言うのは嘘で、表情は冷たいものだ。冷たい表情なのだが、いつものニヤニヤとした笑みの時より少し明るかった。

「…………やべえな」

財宝は呟いた。顔は冷たく無機質とも表現できそうなほどの無表情だったのだが、汗という汗が体中から吹き出ていた。それに気づいたのか、顔に手を当てる。手を退かすいつものようにニヤニヤと気持ち悪く、マイナスにしか表現できない笑みがあつた。だが、汗は止まらず、ダラダラと流れている。

「…………下手すれば有明ちゃんも殺されかねない」

財宝はその原因となる人物を思い浮かべる。可能性しかなかった。アイツなら殺してしまいそう。財宝はため息を吐き、頭に手を置いた。

「……やっぱり、ここは引くしかないか」

もう少し遊んでいたかったが仕方が無い。悪にも正義にも付かなかった第三者の自分はいつでも抜けられる。抜けるなら今しかない。財宝は握り拳を作り、考えをまとめた。

「逃げ 「……財宝くん？」 「あつ……」

財宝の計画が音を立てて崩れ落ちていった。めだか達が見たら驚いただろう。あの財宝の引き攣った顔がそこにはあったのだ。

x

「財宝くんだよな？ 財宝くんだよな？ 五歳になったと同時に何方不明になった財宝くんだよな？ まさかこんな夕方の公園で出会えるなんて夢にも思わなかったわ！ 奇跡……いや、これは運命と言う赤い糸が全てを結んでくれたに違いないわ！ 絶対そうよ！ 何てったって世界は恋する乙女に優しいんだもん。これくらいやつてくれなくちゃ駄目よ絶対。その期待に答えないとね！ それで財宝くん……知り合いに女の子はいる？ 勿論いないよね？ ああ、めだかちゃんとは別よ。だってあの子は恋愛じゃなくて動物を愛するようにしか見えないもの。だから女子（めだかちゃんを除く）ね。それならいないでしょう？ ってあれ？ 財宝くん、そんな顔出来るようになったの？ いつも無愛想で無口でクスリともしなかったのに……その表情もいいわね！ クールとはまた違った良さがあって！ ってあれ？ どうして無表情になるの？ それに凄い汗。何か怖いものにも遭遇してしまったかのよう……心配しないで！ 財宝くんの敵は私の敵でもあるの！ ちゃんと口に出して言つてよ？ それなくとも表情が顔に出ないのは自分で

もわかつてるでしょう？ いやいやいや！ 悪口とかじゃなくていい意味でよっ！ 私が財宝くんの悪口なんか言うわけないじゃない。そんなの明日世界が腐り果てるぐらいありえないわ！ それぐらい私は財宝くんを必要としているの。その理由を言うのと長くなるからまた今度にするとして、財宝くん。それって箱庭学園の制服よね？ 絶対そうよね？ 今から私が入学する予定の箱庭学園よね？ 立て続けにこんなことが起こるなんて！ 嗚呼、神様は赤い糸で編んだ絨毯を敷いてくれてるようだわ。財宝くんと私を応援してるのね。それでね財宝くん。もう一回訊くけど知り合いに女の子っている？ 勿論、私を除いて。いないよね？ 勿論いないよね？ いるわけないよね？ その顔から判断しにくいのだけれど…… いないよね？ まあ、昔から財宝くんに近づく女子は何故か次の日から学校に来なくなるのだから誰も近づかないよね。よかったよかった。だけど、それは五歳の時の話。十数年経った今ではその性格の変わりようといい、何か如何わしいことの一つや二つはあったんじゃない？ と私は考えたりするのよね。怪しいわ。怪しい怪しい。財宝くんを疑いたくは無いのだけれど、こればかりは仕方の無い事よね。夫が浮気してるか妻は気になるものなのよ。だからそういったことはすぐに言った方が身のためよ？ 心当たりはある？ 無いつて断言してくれたら嬉しいわ。でもあるって言ったら…… 狂ってつい、殺してしまうかも…… それほど愛つてものは深く、傷つき易いの。でもね、私は財宝くんはそんな事しないって信じてるから！ だって、財宝くんは私にメロメロだもの。そんな財宝くんが雑草如きに話掛けるわけないもん。世界の常識の一つよ。二つ目は女は財宝くんに近づかないって約束。どちらも当たり前中の当たり前。破ると言う考えすらもってはいけないの。わかった？ ってわかつてるか。この話、最後に会った時にも言ったものね。忘れてるわけ無いよね。ここで忘れたなんて言ったら骨という骨が砕け散るしかないものね。ないない。あはは。それでね、財宝くん。その手に持つて

るお菓子は？ ああ、誰に貰ったじゃなくて甘い物食べれるようになったの？ って意味よ。 甘い物なんて見るだけで気分が悪くなる時まで豪語してたのに今では好物になるまで食べれるようになったのね。 偉いわ。 努力したのね。 これでバレンタインデーのチョコレートを甘口に出来るわね。 ああ、後で今までに作ったチョコレートを持ってくるから全部食べてね？ 毎日、一個ずつ作ったの。 でも、甘くないようにしちゃったな。 そうだ！ 今まで作ったチョコレートを全部混ぜて砂糖を塗せ^まばいいのよ！ そうすれば甘くなるし、我ながらナイスアイデアね！ じゃあ、私の家まで…… えーと…… 財宝くんって一人暮らし？ なら同居しない？ 私がそちに行くからさ！ いいよね？ それくらい。 今まで会えなかった分の寂しさも有ったし、ずっと一緒にいたいからね。 一つ返事で了承してくれるのが財宝くんのいいところよね。

私は昔からこの手のせいで家事は出来ないけど…… 『財宝くんに触れることは出来るんだし！』 財宝くんのその異常さのお蔭で私は財宝くんにだけ触られる。 これは仕様ってやつよね？ 財宝くんの好きなゲームで言う設定ってやつよね？ 嬉しいものね。

設定。 私が財宝くんに会ったのも設定だし、恋をしたのも設定。 離れ離れになったのも設定で、再開出来たのも設定なのよね。

ああ、それでこのタイミングに会えたのね。 ちょうど今から過^{マイ}負^{ナス}の教室作りの為に一人で敵陣に向かう途中でなんて、設定以外ありえないわ。 これを乗り越えて幸せになれって設定なのね。 初めての共同作業…… 幸せになる序章ってわけね！ だからね、財宝くん。 一緒に行こう？ 今からめだかさ^{プラス}率いる幸せ者にちょうかい掛けにいくの。 財宝くん、あなたの能力なら全員瞬殺出来るでしょう？ 私知ってるのよ。 その能力は自分を幸運にするだけじゃなくて運の相場を変える事が出来るんでしょう？ つまり、自分の幸運をあげると同時に他人の幸運を引き下げることが出来る。それが『福作用^{ブラック}』よね？ 全部球磨川さんに聞いたわ。 だからお願い。 一緒に来て。 あなたは敵陣に入ってと同時に他人の運

をマイナスにすればいいの。簡単よね？　そうすれば皆幸せになれる世界が訪れるの。誰も私達の邪魔なんかしない平和な世界がね。あのめだかさんに勝てるなんて無理だとか思ってるんでしょ？　はつきり言うとは不可能に近いわ。いや、不可能よ。過負^{マイ}荷^{ナス}が異常に勝てるわけじゃない。過負^{マイ}荷^{ナス}ならね。だって財宝くんは異常じゃ^{プラス}ない。なら勝てるわ。めだかさんだって運には勝てないのよ。現に、子供の時は攻撃できなかったし、全て引き分けになったから大丈夫よ。負けさえしなければ過負^{マイ}荷^{ナス}にとつてそれは勝利よ。寧ろ、引き分け以外に勝利の方法なんて無いわ。勝ってしまったらそれはもう異常だもの^{プラス}。勝利しないがゆえに落ちこぼれなのよ^{マイナス}。だから一緒に戦って幸せになりましょう。全ては平和の為に、幸せの為に」

「……………」

ほぼ息継ぎなしで言い切った彼女の言葉に財宝は言葉を失った。財宝の冒険の書が消えかかっている。だが、財宝の冒険はまだまだ続くのだった。運を操れるのに運命には逆らえない勇者がそこ^{マイナス}にいた。

箱庭学園二年十三組一番、××× 財宝。二年十三組には他に生徒がいるのだが、登校しなくてもよい為、必然的に財宝が一番となった。但し、授業は行われず、黒板には大きく『永久自習！』と書いてあった。そして、その唯一の登校者である財宝は箱庭学園の生徒なら誰しもが知っている有名人だ。生徒会長の様な目立ち方ではなく、悪い意味でだ。別に思い切った悪い事をしたわけでもなければ良い事をしたわけでもない。唯、関わった者の殆どが二度と会いたくないと言いつつた。それほど気味が悪く、近寄りがたい人物だという事がわかる。

そんな危険人物である財宝は今……

「……どうしてこう、俺は運が悪いのだろうか……」

自分の運の悪さを憎んでいた。いや、正確には運ではなく、運命というものを憎んでいた。財宝の能力でそこところ調整できるのではないか？ という疑問が湧くだろう。実際、可能である。だが、財宝はそうしない。便利であり、使いがってが良すぎる為、人生に深く干渉するような事には使わないのだ。本人曰く、『正義の味方なら正義の為に使用する。悪の根源なら己の理想の為に使用するだろう。だけど、俺はどちらでもない。だから人生に深く関わるようには使わないのだ』と、ニヤニヤと笑わず、少しだけ微笑みながらそう言っていた。

財宝が実は優しい性格の人なのかという考察はまた別の話。

そして財宝の状況を説明しよう。今、財宝は軍艦塔ゴーストバベルと呼ばれる

旧校舎に向かっていた。財宝が最も苦手とする人物と一緒に……

その人物は財宝のことをよく知りすぎていて、触れたものが腐ってしまふというびっくり人間だった。但し、腐らせるに財宝は含まれない。財宝の知的好奇心による実験により、そのような結果が出たのだ。改めて財宝の能力は異常でも特別なものなのだと実感できるだろう。

「じゃあ、私が戦うから財宝くんはサポートしてね」

財宝の苦手とする人物、『江迎怒江』えむかえむかえはマイナスと言えるような異質なオーラを出しながら、包丁の刃を迷うことなく握り、失礼しますと、言いながらドアを開けた。

「すみませーん。此处をマイナス十三組の教室にしたいんでえー、この軍艦塔ゴーストバベルを問答無用で速やかに明け渡してもらえますうー？」

「マイナス十三組ねえ……それよりさ、どうしてキミが一緒にいるのかな？ 財宝くん」

軍艦塔ゴーストバベルの管理人である、『黒神真黒』くろかみまぐろはマイナスがやってきた事よりもどうしてマイナスに付いているのかの方が気になった。

「……………どうでも おおっと！」

財宝は自分が無表情だった事に気づき、顔を手で覆う。数秒経ち、手を取ると真黒達の知っているいつものニヤニヤ顔に戻った。真黒達は財宝の行動の意味がイマイチわからず、不思議そうに首をかしげた。

「……今のはなんだい？ 何か意味があつたかには見えないんだけど…… キミは何故か解析できないから困るよ」

「解析出来ないじゃなくて解析させないだよ。俺の異常性は使い勝手いいもんだからそんなことさえ出来てしまうのさ」

その場にいた怒江以外の人物、真黒、いたみ、くじらは財宝の異常性を幸運なだけと勘違いしている。幸運とは人によって価値観が違い、日時、気分などによって幸せと言うものは変化するのだ。それを自由自在に操れるのが財宝の能力である。メモリーカードにゲームのデータをいくつも保存するように設定でき、上書きして保存する事も可能なこの能力は、もはや異常の域を凌駕している。

例えるなら、めだかや球磨川がゲームのキャラクターとした場合、財宝はそれを操作するプレイヤー。つまり文字通り次元が違うのだ。強い弱いでも勝ち負けでもなく、もともとそんな勝負するらないのだ。だが、財宝は自分の設定を低めて楽しんでいる。通常のノーマルモードではなく、ハードモード。ゲーム好きの財宝にとって自分の完成された能力はあまり好ましい物ではなかった。

なぜなら元からレベルがカンストしている主人公を操って何が楽しいのだと、ゲーム理論で嫌っていた。苦戦して戦うからこそ勇者の楽しみってものがある。そんな考えの持ち主だった。

そんな財宝もいつしか王道を毛嫌いするようになった。明らかに物語の主人公にしか見えない人物を見つけてしまったからである。なら、自分はどの立場になるのだろう、と財宝は考え、思いついたのが……

負けイベントである。

負けイベントとは通常、勝たなくては進まないイベントなのが、明らかに自分の身の丈にあったレベルではない敵と戦い、仕方なく負けてしまうといったイベントなのだ。その負けイベントの敵になってやろうと考えたのだ。あくまでストーリーとは関係ない、お遊びの戦闘。敵か味方がさえもわからないどっちでもないキャラクターだ。

そしてその考えを貫いた結果、彼は嫌われ者となるのだが、それはまたいつか話せる時が来るだろう。

話を戻そう。現在、怒江、財宝の二人がマイナス十三組の教室確保の為、奮闘しているところだ。

「そんな事どうでもいいですよー、早く此处を引き渡してくれませんかあー？」

「そうだよ。早く渡しちやいなよ。面倒だしさ。それと、キミのコレクションは燃えるゴミでいい？」

ニヤニヤと笑いながら財宝は真黒の妹達のグッズがあるであろう部屋の方角を指差した。

「……二対一か……キツイな」

「ん？俺は戦わないよ？だって付添い人だし」

財宝はそう言うとその場で横になって戦わない事を態度で示した。

「そうか…… 仕方ない…… 管理人として戦うしかない な
！」

真黒は駆け出したと見せかけ、自分の履いていた靴を飛ばした。

「小賢^{こちか}しい！」

怒江は持っていた包丁を器用に投げた。包丁は靴に刺さった。
すると、後ろから気配がするではないか。怒江は驚く。

「後ろですかっ……！」

気配に一早く気づいた怒江はすぐさま振り向いた。

「その通り、後ろだよ」

その声は振り向いた怒江のすぐ後ろから聞こえた。何故か真黒はパンツ一枚という誰かが騒ぎそうな姿だった。つまり、真黒は靴を飛ばし、その靴に目がいつている間に脱いだ服を怒江の背後に投げたのだ。その行動は正に、魔法使いと言えるだろう。

そして、真黒は人に触れる程度のチョップを当てようとしたのだが……

「なっ………！？」

その攻撃とすら呼べない攻撃は、意を反して右斜め下に大きくずれた。

「ああ、言ってなかったね。俺は戦わないって言っただけさ。協力はしてるんだぜ？ サポートするのは俺にとっては戦うじゃないんでね」

財宝はあくまで、自分がメインとして戦わないという意味で言ったのだ。別に能力を使わないとは言っていないかった。

「それにさ、俺がいなくても江迎ちゃんだけで十分戦えるんだからね」

真黒はその言葉を聞き、怒江の方を見た。

怒江の掴んだ真黒の着ていたシャツは腐り果てていた。

真黒は自分がどんな状況に置かれているのかを考え、ため息を吐いた。

9（前書き）

急展開注意

「（どうすればいい……）」

黒神真黒は悩んでいた。今の状況を打開する策が浮かばないのだ。

改めて自分の置かれている状況を整理してみた。現在、自分の妹とその親友が自分の背後に、入り口付近には球磨川の計画の為、呼ばれたであろう少女と、この学園内で一番関わりたくない非力な少年が一人だ。これだけだと勝てそうな気もするが、ステータスの差が段違いだった。

自分と妹は戦闘には向いていないし、唯一、戦闘に向いている妹の親友も今は治療中の為、戦う事はできない。それに引き替え、相手は自分の脱ぎ捨てたシャツを腐らせる少女、触れる事すら出来ないいまだに解析不能な少年。しかも相手はプラスとマイナスという異色なコンビ。勝てるわけない。

通常、マイナスとプラスが組むことはありえない。性格上の問題で組むことすらできないのだが、財宝の性格によってその問題点が解決されたのだ。昔に関わっていたおかげだろう。

プラスとは勝ち続けるもの。マイナスとは負け続けるもの。それが一緒になったらどうなるかなど分かりきったことだ。勝利も敗北も知り尽くした二人にどう対応できるんだと真黒はイライラしていた。

神にでも祈るしかないのかと諦めかけた時、ドアが開いた。

「お兄様、お姉様、何やら騒がしいのですが。セクシャルハラスメントの真っ最中ですか？」

真黒の妹、めだかだった。真黒はナイスタイミングで来た妹を見て、大きくガッツポーズをした。

「……勇者か……めだかちゃん 駄目だ。逃げよう江迎ちゃん」

財宝は相変わらずの主人公っぷりに苦笑いし、江迎に逃げようと呼びかけた。

「どうして？ 財宝くんだったらこんな奴ら簡単だよ。」「無理だよ。俺が例えめだかちゃんに勝てたとしても次には負けるだろうさ。主人公だからね。そういった事は学ラン先輩の方が向いてると思うよ。空しく勝たせるのだから、俺より向いてるよ。だから逃げよう。経験値なんていらないよね？」

財宝がそう問いかけると怒江は黙ってこくりと頷き、床に手を当てた。

「戦略的撤退ってやつだ。また遊びに来るかもね。今度はそっちの味方になるかもしれないしね。じゃあ、また今度」

財宝がニヤニヤと笑い出したと思ったたら消えた。のではなく、江迎が地面を腐らせ、逃げたのだ。めだか達は予想外の人物の登場に驚きを隠せないようだった。

x

「久しぶりだね、財宝君。 いや、×××の方がいいかな？」

「……苗字はやめてほしいな、もう聞きたくないし」

「わかったよ財宝君、だからニヤニヤと笑おうぜ？ キミの作ったキャラは最後まで通さないよね」

あははと少女は笑った。少女とは言えないかもしれない。本人いわく、五百年は生きているとのこと。なので少女とはいえないが、財宝が明らかに女性には言っではいけない一言を言っしまい、少し消されかけたのはつい最近の事。

「それより僕に用って何だい？ キミなら大抵解決出来そうだけど」

「今回はそれも叶いそうにないんだ。 だからキミを頼ったってわけ」

財宝は少女に全て説明した。少女はそれを聴き、ニヤリと口元を歪めた。全て、自分の思い通りに動いているとばかりに……

×

それからしばらくの間、財宝が学校に来ることは無かった。最初はめだか達も心配していたのだが、マイナス側だと思っためだか達は何か作戦でも練ってるのだろうと気にしなくなった。

生徒会がリコールされ、戦拳も二戦終わり、一対一となった。そして三戦目……

「では、サブプレイヤーをお選びください」

今回の戦拳の審判を務めている長者原融通がそう言った。今回のゲームは火付兎。通常、一対一の戦いなのだが、今回は異例のタッグマッチ。戦い終えた者も含め、誰かをサブプレイヤーとしてのバトルだ。

「まあ、俺」「……俺にやらせてくれないかい？」

善吉の言葉を遮った者は財宝だった。

「……財宝!?」「……」

「……別に俺だっていいだろう?」

「本当に財宝なのか? なんだか子供の頃にそっくりなのだが……」

その時の財宝からは今までの気持ち悪さも、近寄り難さも、何も無く。唯、普通の少年だった。さらに当の本人は憑き物が落ちたかのように性格が変わっていた。今までのニヤニヤと人の気分を害すような笑顔を浮かべず、異質な言葉の羅列だった言葉も口数少なく、昔の彼を知らないと多重人格なのかと疑うレベルだった。

「お前! マイナス 球磨川側に付いてたんじゃ」「……違うよ。あくまで幼馴染のお手伝いしてただけだよ」

またも善吉の言葉を遮って財宝は答えた。いつもの財宝なら気持ち悪くてイライラするのだが、今の財宝は物静かでクールだった為、何か怒りにくいものがあった。

「久しぶりね財宝君、その制服似合ってるわよ」

善吉の母、人吉瞳^{ひとよしとみ}が財宝の制服を指さし言った。

「あつ！ お前なんでその制服を！」

財宝が着ていたのは生徒会が用意した特別性の赤い制服だった。

「……だって瞳先生に作ってもらったよう言っておいたからね」

皆は瞳の方に目を向けた。

「あはは、秘密兵器的ポジションだし、言わなくていいかなって思ってた」

瞳の反応に苦笑いのめだか達一向。それに財宝が一言。

「……それに赤いから三倍の何とかかもしれないし」

気持ち悪い財宝の第一人称がゲーム脳に変わった瞬間だった。

x

「どうして財宝君……そっち側に！！」

江迎が信じられないようなものを見るかのように驚きながら、財宝に向けて叫んだ。

「……だってさ、俺は幸せ^{プラス}だもん。不幸せ^{マイナス}には付けないよ」

財宝は悟った目で答えた。それは本当に幸せそうな目で、今ま

での悪戯ものの財宝が成長したかのようにだった。

「では始めましょう。 会計戦『火付兎』 スタート」
「」
待って」

球磨川は融通の言葉を遮った。

「『ちよつといいシーンだったから言いにくかったんだけどさ』
『キミの能力だったらバトルも何もできないよね？』」

球磨川は財宝の能力のせいで今回のバトルそのものができなくなってしまうのではないか、と言いたいのだ。 財宝の能力は戦闘というものを木端微塵にしまい、勝ちも負けも引き分けもすべて無かった事にしてしまうからだ。

「……その点は問題ないよ球磨川くん。 だってね」

財宝はポケットから、あらかじめ用意してあったのであろうナイフを取り出し、自分の手の甲を薄く切った。 切られたところからは少しずつ血が流れていく。

「……あんな能力捨てたから」

財宝はニヤリと口元を歪めた。

10（前書き）

念願の十話です。

植物園西口

「財宝君、異常性を捨てたって……本当なの？」

「……まあ、捨てましたね。ポイツと」

少年はニヤニヤと笑わず、何を考えてるかわからない、無に近い表情で言った。

「捨てたってどうやって？」

追及してくる瞳、そりやそうだろう。異常性を捨てるなど通常、ありえないのだから。まだ、くじらの作った『ノーマライズ・リキッド』でさえ、まだ未完成なのだ。何処でどうやったかを聞き出したくなる。

「……企業秘密ってやつです。教えちゃいけない約束ですので」

財宝は瞳から視線を反らし、自分に付けられたブレスレッドを見つめた。そしてニヤリと口元を歪め、自分の憶測を言った。

「……瞳先生、球磨川は絶対に俺を殺しに来るでしょうね」

「その厄介な異常も無くなった今がチャンスとばかりにね。引き分けのルールを聞いた時、目が途轍もなく輝いてたし」

瞳の話聞いた財宝は口元だけ笑っていた。

「……瞳先生、俺が異常じゃなくなったと聞いてノーマルだと思いましたか？」

「えっ？ そうじゃな　　！？」

瞳が驚いたと同時に植物園の植物が急成長し始めた。急成長という表現をも超える速度だった。その植物の茎が瞳に絡みついた。

「……面倒だな」

財宝は次々と襲ってくる茎から素早くかわした。と思ったら減速し始め植物の前に立ち止まり、茎を掴み、引きちぎった。

「ざっ……財宝君？ そんな超人設定だったっけ？」

植物の拘束から解かれた瞳は驚きながら財宝を指さす。一応、財宝は運を操れるものの、その他の才能は皆無という『設定』だった。

「……そんな設定捨ててきましたよ。これが俺の新しい異常……いや、異常じゃないや、過負荷、『業突く張りの導き』です」

少年、いや、男は無表情かつ無機質的にそう言うのだった。

×

「業突く張りの導き？」
グリード

情報が交差し、上手く理解出来ない瞳に財宝が説明した。

「……俺のステータスをあべこべにする能力です。俺の行動パターンによってステータスが決まります。だから、あの時、速かったり、強かったりバラバラだったでしょう？」

「ああ……」

言われてみればその通り、いきなり速くなったと思えば遅くなり、いきなり強くなったかと思えばその後、手を痛そうに抑えていた。

「……そのステータスの変化の条件が酷いものでしてね。例えば、俺が一步前に進めばステータスが変わりますし、俺が行の文字を話しても変化します。そんな面倒な条件が二十九万八千六百二十三通りありましてね」

面倒な設定ですよ、と他人事のように続けて言った。

×

別の部屋にて

「なんじゃそりゃ!？」

善吉がありきたりな反応で驚いていた。

「そんなのマイナスって言えるのかよ！」

善吉の考えはおそらく、変動パターンを極めれば自由自在に操れる戦闘型のプラス。決してマイナスとは程遠いものじゃないのか

などと言っ考えたった。

「いやいや、酷いマイナスだと思うぜ？ 俺は」

そう言ったのはくじらだった。

「いや、でも師匠。 こんな使い勝手のいいマイナスって
どこに使い勝手のいいところがあるんだよ」

善吉の言葉を遮り、くじらは語る。

「俺が見た限りでは呼吸だけでも九十八パターン変動してるぜ？
それにあれを数週間でコントロールってどれだけ異常なんだよ」

くじらの言っ た呼吸パターンの変動とは、財宝の速度が上がる前、
呼吸の仕方が違っ った所があっ たのだ。 通常の呼吸とは違い、
大きく息を吸っ たと思えば、呼吸を止め、息を吐かずにさらに息を
吸っ ていた。

そんな些細な所まで見逃さない辺りが研究者くじらの凄い所だろ
う。

「一つに留まれない……か、酷い欠点^{マイナス}だな」

めだかは悟っ たような目でモニターの財宝を見た。

「だが、どうして奴は気持ち悪さというものが無いのだろうか」

疑問は募るばかりだった。

×

「……兎に角、球磨川君を倒しましょう。一面に出てきたクツパは弱い筈ですから」

「そのゲーム理論は気に入らないけど、まあ、それしかないよね」

「……じゃあ、俺が一人で探してきますよ」

財宝は右手に握り拳を作り、一回深呼吸をした。瞳が見たのはそこまでだった。いつの間にか財宝は消えたいたのだ。ありのまま今起こった事なんかそれだけだった。

「さつきとは比べものにならないくらいに速いわね……ってあれ？財宝君のマイナスって『自分のステータス』を入れ替えるのであるって、パワーアップはしてないって事だね。つまり、どれか規格外なステータスがあるの？」

うーん、と瞳が悩んでいると後ろから気持ち悪い気配がした。

「『これはこれは瞳先生』『二人つきりだなんて運命ですね』」

改めて瞳は財宝の運が無い事を感じ取れた。

×

「ああ、どうして財宝くんは財宝くんなの？」

「……運が悪かったからだよ」

財宝は自分の運の悪さに嫌気がさしていた。

11 (前書き)

恐縮です

ああ、どうして俺はこんな面倒な事に巻き込まれているのだろうか。これは俺の人生の分岐点っていうやつ？俺がどんな悪い事をしたら巻き込まれるというん　心当たりが多すぎて数えきれないや。どうでもいいや。これも運命ってやつだろう。さあ、死ぬのだろうか、生きるのだろうか。神のみぞ知らない。俺だけが知りた　い。欲望の塊のような考えが頭を支配するようだ。喜劇なのか？悲劇なのか？茶番劇といきたい所だけどそうもいかないようで、ぐだぐだに終わリたかったのに、流れ弾で死にたかったのに、目立って死ねと言うのか。やってられない。リセットボタンが見つからない。どうしてさあ、こう、

運が悪いのだろうか。

いつだって運が悪かった。両親は金に目が眩んで、友達とは離れ離れで、一人孤立して、運が良いだなんて思えなかった。だけど、人間は俺の事を運が良いと言った。幸運って何だろう。怪我しなくてお金さえ入れば幸運何だろうか。あーやだよ。そんな贅言言てられないよねー。でもさ、いらねえよこんな異常。何がラッキーだよ。大嫌いだ。

出鱈目でバラバラでぐちゃぐちゃになって、死にたい。

死ぬときぐらい幸運ふにうじゃなくてもいいだろう？　そんな些細な望み。

×

「……大体だけどキミが何をしてどうやって俺を倒すかわかるよ？ さっきの植物の急成長を見ればね。だけど、あくまでそれは俺がノーマルになった場合だろう？ ならさ、キミと同じ過負荷になればいいんだ。マイナスにはマイナスだよ」

マイナスの振りはやめて、本物のマイナスになったんだ。と補足した。

「なっ……！？ それなら私達側に……」

「……昔の俺の癖忘れたの？」

財宝の一言に気づいた怒江は慌てて財宝に問う。

「何処で嘘を吐いたの！？」

ニヤニヤと笑っていた頃の財宝はしなかった事、それは嘘を吐かない事だ。昔の財宝はよく嘘を吐いていた。いい嘘もあれば悪い嘘までも、しかも何処で嘘を吐いたかわからない程自然で、信じ込ませるのが上手かった。だからこそ、怒江は警戒しているのだ。下手すれば球磨川の計画が全て潰れてしまうと、それ程財宝は危険で異端だった。

「……教えない。ネタバレしたら面白くないだろう？ ゲームは楽しまないかね」

心底楽しそうな声で無機質のような笑みを浮かべるのだった。

×

「……まあ、ゲームも何も、もう終わりそうだけど、そうだよね、球磨川くん」

財宝は落ちてた石を手に取り、背後の木に向かって、振りかぶり、投げた。それは石なのかと疑いたくなる程の速度で、木に当たり、木は真つ二つに折れた。ありえない出来事、怒江も、球磨川も、そんな状況を想定しなかっただろう。

「ああもう」『何なんだよ君は』『僕の邪魔ばかりしてさ』『作戦も全て丸つぶれ』『オマケにマイナスになった？』『ふざけるな！』『マイナスにとって能力よりも性格なかみだろう？』

背後からマイナス特有のオーラを漂わせながら現れたのは、球磨川と何故か一緒にいた瞳だった。

「……性格なかみな、俺も変わっちまうと思ったけど全然だね。まあ、俺のステータスでは今のところバカだし、キミの大好きな副会長に聞いたら？ 理由も中身も何でも知ってそうだし」

ウツキ 財宝は球磨川が嫌がる方へ嫌がる方へと持つて行った。当然、球磨川はその言葉を聞き、取り乱さずにはいらなかった。自分以外にもあの人を知っている人物がいる事が想定外だったのだろう。だが、球磨川は笑顔ボーカフェイスだった。流石球磨川と言った所だろう。それを見た財宝はブレスレッドを確認した。残りはわずか数分といった所だ。怒江の話最後まで聞くんじゃないかなーと思いながら乱数調整する。

財宝が思うに、球磨川が見たのは自分の速さと攻撃力だけ。つまり、『全てを知られたわけじゃない』それさえわかればこっちのものだとにかくに球磨川の背後へと周り、攻撃を仕掛けたのだが、

「『あまいよ』『僕だつてキミの行動ぐらい読めるさ』」

すかさず螺子を財宝に飛ばす。その螺子は財宝に当たる直前、

不自然に反れた。

「『なつ!?!?』」

球磨川が驚いた隙を突き、財宝の蹴りが炸裂。球磨川は近くに
あつた木まで飛ばされる羽目に。

「……理解した気になるのが一番恐ろしいとあんしんいんさんが言
つてたつけ。どうでもいいけどね。それより、江迎ちゃん。
鍵を渡してくれないか?」

財宝は怒江に近づき、球磨川を無視して言った。

「駄目! 私としては渡したいのだけれど……私情を挟んだら他の
人達^{ナス}が……」

「……大丈夫、他のマイナスだつて幸せになれるさ。だつてこっ
ちには主人公^{めだかちゃん}がいるんだ。心配することないよ」

「……どこまでが本当?」

「……^{オール・ノンフィクション}全て本当つてね」

「わかったわ……財宝くんが言うからにはそうなるのでしょうね」

怒江は疑ってかかったものの、財宝の言葉にあっさり引つかかってしまい、鍵を渡そうとする。確実に私情百パーセントなのだが本人にとっては真剣なのだろう。完全に恋する乙女モードの怒江が鍵を渡そうとした所で、

螺子が飛んできた。

螺子は財宝と怒江に刺さり、背後の木へ飛ばされた。まるで先ほどの球磨川のやられようを再現しているように見えた。

「っ！？ 球磨川くん！」

「『あの二人のマイナスを無かった事にしました』『これで二人はノーマルです』『怒江ちゃんは普通クラスにでも入れてあげてください』」

球磨川は淡々と瞳に言う。球磨川はもう、怒江に興味が無いようだった。球磨川は落ちぶれている者や不幸な者の味方であり、幸せ者には興味がないのだ。つまり、球磨川は怒江をマイナスとは思っていないかった。

「……兎に角、この勝負はこっちの勝ちでいいわね？」

瞳は怒江の鍵を使い、倒れていた財宝のプレスレッドを解除しようとしたのだが……

「鍵穴が無い……！？」

鍵穴は無かった。確かに勝負の前にも、二手に分かれた時もあった筈なのに、と瞳が考えていると、いつになく不気味な球磨川は自

分のブレスレッドを見せつけながら口元を歪め、口を開く。

「『僕と財宝くんの鍵穴を無かった事にしました』『これでこの勝負は引き分ける事しかできません!』」

いつものような笑顔ではなく、純粹に楽しそうに笑う球磨川は途轍もなく奇妙で、気持ち悪かった。

「『これで財宝^{ナミ}も僕も死ぬ!』『ラスボスと一緒に死ぬんだ』『光荣だろ?』『あつははは!』」

球磨川の笑い声は爆発音でかき消された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0687y/>

ラッキーな少年の物語

2012年1月5日21時45分発行